

二十歳の誓い

私は父の仕事の関係から幼少期の多くを海外で過ごしました。現地の日本人学校は、生徒の入れ替わりが激しく、数カ月一度、新たな転入生の友達ができませんが、折角仲良くなった友達はすぐに転校してしまいます。「皆どうせ離れ離れになる」そう思うと辛くなり、友達と距離を置く癖がついていました。

小学5年生の時に日本に帰ってきました。京都の学校で受け入れてもらえるか不安であった私を、先生やクラスメイトは気にかけてくれて、温かく迎え入れてくださいました。

同じ頃、暴走族を取り締まっているパトカーを見て感動し、将来は警察官になりたいと思い、中学校からは剣道部に入りました。私は興味ある事は熱中出来るのですが、他を疎かにする傾向があり、周りからよく叱られていました。しかし、高校の時に出会った先生は、「そこも君のいい所だ」と初めて認めてくださったのです。その先生の勧めで参加したイギリスのサマースクールでは、海外在住の経験を活かし、積極的にコミュニケーションを取った結果、その意欲が主催者の方に認められ表彰されました。そのあとも様々な事に取り組み、自信をもった私は自己推薦入試を受けて第一志望の大学に合格することができたのです。

憧れの大学生活に期待を膨らませましたが、入学式の前日に交通事故に遭い、入学の日を一人病室で過ごすこととなりました。しばらくは遠隔で授業に参加しましたが、途中で勉強についていけなくなった私は、ほとんどの単位を落としてしていました。

夢を諦め意欲を失っていた私ですが、ある交番の警察官と出会い、時折交番に立ち寄っては他愛のない話をする関係になりました。事故の話や成績の相談にも乗ってもらううちに、徐々に前向き気持ちになっていったのです。「警察官になって事故や犯罪で悲しむ人を減らしたい、人の気持ちに寄り添える人になりたい」私の新しい目標が見えてきました。

また、交通事故に遭った時、動けない私を一般の方々が率先して救助してくださいました。私はその姿に心を動かされました。「いざ」という場面に遭遇した時、自分が少しでも力になりたいと考えた私は、京都市の消防団に入団し、積極的に訓練や講習に参加しています。

振り返れば、私はずっと恵まれた環境にいたのだと気づきます。これからは自分が社会を支える一員となって、次の世代に繋ぐ番です。この感謝の気持ちを忘れずに、目標に向かい、努力を続ける事を宣言し、「二十歳の誓い」とさせていただきます。

令和5年1月9日 新成人代表 松尾 颯太